船底の黒猫

20x50枚

高岡啓次郎

今日も朝早くから船底にへばりついている。グラインダーの鋭い金属音が重なりあって耳をつんざく。ケレン用のトンカチで鉄板を激しくたたく音が加わる。近くを通る汽船がエンジン音を残して通り過ぎていく。カモメが浜辺に黄色い声を響かせている。そんな騒がしい海岸がぼくたちの仕事場だった。

「ひでえ錆だ。このボロ船はいいかげん廃船にしたほうがいいんでないべか」

そんなぼやきが近くから聞こえてくるかと思えば、夕べ、かかぁとやり過ぎて腰に力が入らないという油のぬけたような声を出すやつもいる。そうしている間も、削られた硬い飛沫が容赦なく飛んでくる。ニキビの跡が残ったぼくの顔に、焼きゴテをあてられたような痛みが走る。

ただでさえ薄暗い船底で、頼りにしている防

塵用のメガネはさっぱり役にたたない。すぐに自分の吐く息で曇ってしまうのだ。スクリューの周辺や船を支える架台の近くなどは危険だ。ぼくは思わず舌打ちして放り投げた。

周囲を見たら他の作業員たちも同じようにしている。おのおのが半開きの目を無理やり見開きながら作業が続く。古い塗料と錆の匂いに混じって潰れた貝殻の磯臭さが鼻をつく。

「せめて一万でも貰えたらなぁ」と不満をもらすのは、どう働いても日給が六千円と決まっている右隣りにいる小倉のとっつぁんだ。真っ黒い顔から白い歯を異様に目立たせ、潰れた声で言う。雨が降ってくると今日はもう終わりだと言ってワンカップの酒を飲み出すから驚く。誰もとがめないのが不思議だ。

だが、このとっつぁん。なかなかの苦労人らしい。炭坑夫を長く勤めたあと、数え上げたらきりがないほど多様な仕事をしてきたという。六十をとっくに越えているが若者に負けない気骨と体力を兼ね備えていた。

反対側からヌルッとした声がした。

「ところでガンジはなんぼ金もらってる？」

左で作業していたヨシと呼ばれている職人だ。ぼくは言葉を濁して曖昧に笑った。

ヨシの本名は知らない。年齢は四十くらい。いつも針金のように痩せた身体をくねらせている。声も体もひ弱そうに感じるが、ときどきシャツの付け根から濃紺の刺青を覗かせる。龍が彫られているらしく、鋭い目と髭が見えるときにはぞっとするほどの凄味があるが話し方は静かだった。

ぼくには、いつの間にかガンジというあだ名がついていた。昼休みに平和運動家の伝記を熱心に読んでいたからだ。職人の多くは峰岸高志という本名を知らないみたいだし、週に四日しか仕事をしない理由もわからないみたいだ。

ぼくは二十歳になりたてのころからアフリカや東南アジアの貧しい人々に衣類や教材、義援金を送るＰＧＡという活動にいそしんでいた。実際、仕事以外のほとんどをその活動に費

やしていたと思う。小樽から苫小牧に移ったのもそのためだ。当初は適当な仕事がなかったので、最低限の生活費を稼ぐため、支給されたバイクに乗って大量の新聞を配っていた。仲間の何人かがそうしていたし、活動し勉強する時間を生み出すには好都合だった。

海岸沿いがぼくの担当だったから、真冬に凍った岸壁のそばを通るのは危険と背中合わせだった。なんどもバイクごと転んだが、幸いにも海に落ちたことはない。だからほかの人に比べて給料は安くなく、生活を維持するには十分だった。

しかし、同じ活動で知り合った女性と結婚して子どもができてからは収入が足りなかった。そこで勤めたのがこの塗装店だった。ここでは誰もが無頓着で、ぼくの活動について聞く者はいなかった。互いに干渉せず、仕事と酒と麻雀を愛し、何をしていても艶めいた話をするのを忘れない人々がいた。

その日、浜に上げられた漁船の船底では七人

の男たちが働いていた。八月の太陽が砂浜を焼き、その潮臭い熱風が砂塵を巻き込んでくる。まだ新米のぼくは、まつ毛にもぐり込んだ鉄錆の痛みに耐えながら必死で作業に加わっていた。数十センチ眼上には貝殻が隙間なく張りついた鉄板が広がっている。船は箱型の架台で支えられてはいるが、地震で外れでもしたら全員が圧死するのは間違いない。

「こんな仕事ばかりだとかなわんな。いつまでやるんだべ」

小倉が誰はばかることなくつぶやくと、現場責任者であるナカさんが答えた。

「雪がふるまで大部分はこの仕事になる。今年から漁協だけでなくて海陸会社からも塗り替えの話が来ているから」

「まいるな。でも船の塗装は儲かるんだべ。俺たちの出面賃も少しは上がるべか。これだけきつい仕事してんだから」

「どうかなあ、工事の単価はかなり安いから。でも大変なのは確かだから社長も少しは色を

つけてくれるんじゃないかな」

「そうでねえとやってられないべさ。なあヨシ」

小倉がぼくを飛び越してヨシに話をふった。

「そうさなあ。社長に頼んでくれやナカさん。あんたの言うことなら聞いてくれるんだろう」

上半身をそらせたヨシの襟元から例の刺青が見えた。そんなことないですよとナカさんは答えた。ナカさんは十代のころから社長と組んで仕事をしてきたという。この塗装店では最も古参だが、話し方にどこか遠慮がちな部分があり、数人の職人に対しては言葉使いが妙にていねいだった。

今日は朝から全員が夏の容赦ない日差しのもとで、砂の上に横たわっている。最初の仕事は、肩肘をつきながら船底にこびりついた貝殻を皮スキで大まかに削り落とすことだ。硬い貝殻は鉄板の錆と絡みあって容易に剥がしきれない。腐食が進んだ部分は大きな専用のトンカチでたたいて錆を浮かせ、そぎ落としやすくする。それから皮スキをグラインダーに持ち変え

て仕事を続ける。午後になっても同じ仕事の連続だった。わずかな休憩をはさんで、鉄の巨大な板に男たちは挑み続けた。

錆の下から銀色の肌が見えるまで、回転するヤスリを執拗に船底に押しあてる。中途半端なケレン作業は検査でやり直しをくらうことになり、あとで二倍の労力を使うことになるから誰もが運命に従うように真剣にならざるを得ない。あお向けになった七人が地面を這いながら移動してゆく。

「ヒェ！」

ガキンという異常音と同時に突然の悲鳴があがった。とっさに身構えたとき、砕けたグラインダーの刃がぼくの頭上にとんできた。

「どうした」

小倉のとっつぁんが叫んだのと同時にぼくも後ろをふり向いた。他の職人たちも、電動工具のスイッチを切って叫び声の方向を見た。みんなから大将と呼ばれている男だ。名前を知らないので仮にKとでもしておこう。そのKが口

を血だらけにして悶えていた。

「大将やったな」と、小倉が言った。

Kはグラインダーの操作を誤って顔を切ったのだ。高速で回転する丸刃を不用意な仕方でリベットか何かにひっかけてしまったのだろう。うわ唇はみるみる腫れ上がり、たちまち高さが鼻の先端につながった。

ナカさんに連れられてKはすぐに現場を抜け、病院に行くことになった。ナカさんはテルという少し年上の職人に、自分がいない間の作業を早口で説明して車に乗り込んだ。

Kに、どうして大将というあだ名がついたのかは知らない。ぼくが入社したすぐあとに入ってきた二十歳くらいの男で、トロンと下がった目に風船に似た頬をもっている。人が悪そうには見えないがどこか変わっていた。そのKとナカさんがいなくなると小倉はぼやいた。

「ちくしょう。二人分の仕事が増えたぞ。まったく大将は使いものにならん。何とかならないのかテルさん。周りがとばっちちをくらう」

「三好さんの世話で入ったんだ。なにやら訳ありらしいぞ。妾に産ました子でないかと言うやつもいる。好きだからなあ、あの人は」

「女好きのテルさんに言われたらおしまいだ。三好さんは社長の弟だべ」

「だから誰も文句は言えないのさ」

テルさんには二回の離婚歴があり、今は娘ほどの女と同棲しているらしい。二人が抜けたあと、仕事のペースを上げねばならないのは誰もがわかっていた。今まで軽口をたたいていた職人たちも無言で作業の手を速め、けたたましい金属音を船底に響かせた。

この辺りをねぐらにしている猫たちが迷惑そうに通り過ぎて行く。いろんな色の猫たちだが、暗い船底に入るとどれもが黒っぽく見える。

陽も傾きはじめ、早番のカラスが山へ帰るころになると風が強まった。海はうねりだし、波消しブロックに激しく大波がたたきつけた。慣れないぼくは電動工具が二倍の重さに感じてきた。交互に持ち替えるが、腕は振動でしびれ、

もはや感覚がない。

くじけそうなとき、船底に妻や息子の顔が浮かぶ。もうひと頑張りだ。片手で持ち上がらなくなった工具を両腕で支えながら思う。千手観音みたいにたくさん腕があったらどんなにいいだろうと。

昼の暑さは嘘のように去り、ひんやりとした海霧が漂いはじめている。北国の夏は短い。秋はすぐそこで待ち構えているだろう。湿り気を含んだ風は大敵だ。急いで錆止めを塗らねばならない。ケレンしたばかりの鉄は赤子の肌のようにデリケートなのだ。その日のうちに覆ってあげないとすぐに錆がつく。

一列に並んだ男たちがいっせいに新たな動きをはじめた。ぼくも周りに合わせて刷毛を動かす。重金属が入った粘性の高い塗料が猛スピードで鉄板を覆いはじめた。

沈みかけた太陽に厚い雲がかかった。明るかった海はどす黒く横たわり、白い波頭だけが気まぐれに光っている。仄暗い雲間から洩れた光

は船底に頼りなげに届いていた。それがなくなるのと競争しながら船体はみるみる濁った血の色に変えられていった。

働く男たちは目の周りを黒くクマドリした歌舞伎役者さながら目だけをギラつかせている。小倉のとっつぁんが自慢の白い歯をときおり見せていた。

作業の最後にさしかかったころ、錆止めの赤い色はもはや漆黒にしか見えなかった。残業二時間。そんな毎日が雪の降るころまで続くという。疲労が限界にくると、明日は雨が降らないものかと誰もが思うのは無理もなかった。

初めて船底の仕事をしたとき、飛び散る錆の激しさに驚いたが、本人以上に衝撃を受けたのは妻の奈美江だった。ぼくは仕事の車で現場からそのまま家まで送ってもらったが、すさまじい全身の汚れかたに奈美江が叫んだのだ。

「うわっ、怖い！」

「ぼくだよ」

「わかるけど、まるで黒猫よ。動かないでこのままちょっと待ってて」

奈美江は玄関から風呂場に向かう床に急いで新聞紙を並べた

「この上を歩いてくれないかしら」

ぼくは上がりかまちで泥だらけの靴下をぬぎ、自分の家に泥棒に入るような忍び足で浴室に入った。そんなにひどいのか。そう思って鏡を見たとき愕然とした。何という姿だろう。現場では暗くてよくわからなかった。明るい照明にさらされたその姿はまさに黒猫。しかも赤錆色を体じゅうに垂らしたさまは血を流した怪猫そのものだった。

暗中模索のか二ヶ月が過ぎたころ、ぼくはコツらしきものを身につけつつあった。しかし依然としてその動きはたどたどしかったはずだが、そんなぼくに罵声を浴びせる職人はいなかった。

しかし大将と呼ばれているKだけは競争心からくるに違いない妬みに満ちた鋭い視線を

ときどき投げかけてきた。ぼくがまあまあ無難に仕事をこなし、日ごとに塗るスピードを上げていると、Kは厚ぼったい唇を尖らせて、顔全体に不満をにじませる。

社長のはからいで、ぼくはいつも小倉と仕事を共にした。その理由はわからないが、少し肌合いの違う新人を包容力のある小倉と組ませたのかもしれない。ぼくは小倉の飾り気のない人柄に親しみを感じた。入社して三年足らずだというが、豊富な人生経験で身についた物怖じしない態度のせいか軽んじる者はいなかった。堂々とした体格を持ち、錆の汚れを落としても変わらないほど浅黒く光った顔をしており、誰よりも声に生気があった。

小倉が早いうちから、あんたは筋がいいぞと言ってくれたことは大きな自信を与えてくれた。無意識に動かす刷毛づかいがこの仕事にむいているというのだ。ぼくは小柄で痩せた体に劣等感を抱いていたが、塗装職人にはそのほうが向いていると言ってくれた。

「どうしてですか」とぼくは聞く。

「軽いのでどこにでも上がれるし、入り組んだ配管の中にも入っていけるべ」

「なるほど」

「きのう社長に話しておいたぞ。あの人はいいペンキ職人になるってな」

「ありがとうございます」

小倉の話しかたに恩着せがましいところは少しもなかった。ぼくを見る目はなぜか温かみに満ちていた。現場で二人だけで弁当を食べるときも小倉がおもに話をした。

「俺は四十までは夕張で炭坑夫をしていたんだが、仲間がたくさん落盤事故で死んだ。俺はたまたま非番だったから助かったんだ。それから何年もしないで炭坑はだめになったさ」

小倉は閉山で仕事を失ったあとのことも気軽に話してくれる。

「ニワトリの選別は難しいんだぞ。オスメスの区別は素人が見てもわかるもんじゃない。俺らは瞬時に選り分けた」

そう言って手を左右に動かして選別のポーズをとる。目にもとまらぬ速さにぼくは口を開けたまま話を聴いていた。

「養鶏場のニワトリは悲惨だぞ。狭い箱に閉じ込められて、口ばしを半分ちょん切られるんだ」

「口ばしを切る？　どうして」

「餌をたくさん食べさせるためさ。そして卵をどんどん産ませる」

「ひどいことしますね」

「人間のすることはそんなもんよ。みんなが喜んで食べているんだから同罪かもな」

小倉の話はどれも興味深く、聞いていて飽きることがない。おかげで慣れない仕事を何とか続けることができた。体全体から土臭い男らしさとおおらかさをみなぎらせていた小倉をぼくは好きだった。幼いときから父親がいないぼくは包容力に満ちた男を見ると、心に空いた穴のどこかにその人物を収めてしまうところがある。

そうした気持は小倉にも伝わるらしく、休み

の日などに酒瓶を片手にぼくの家に来ることがあった。

「ガンジさんいるかい」

そんなとき、ぼくは一歳にもならない息子を膝に抱きながら酒の相手をした。酔うと（来たときからすでに酔っているのだが）このうえなく上機嫌に、白くそろった大きな歯を出しながら笑ったり歌ったりする。選ぶ曲は浪曲風の演歌がほとんどだった。しかし、その滞在は短くあっさりしたもので、必ず子どもの頭を撫でて帰っていく。

「面白いおじさんねえ」

奈美江はそう言って、小倉がおいていった酒瓶を片付けた。

「あのおじさん六十五歳にもなるのに虫歯が一本もないそうだ」

「すごいわね。どうしてそんなに丈夫なのかな」

「塩だけで丹念に磨くらしい。しかも歯ブラシを使わず指で磨くそうだ。でも、アルコールでいつも消毒しているせいかもしれない。休み時

間にワンカップを飲むことがあるのに、どうして誰も注意しないのだろう」

「それはいくらなんでもまずいわよ。ケガをしたらどうするの。社長さんは知ってるの？」

「たぶん知らないと思う。知っていたら許すはずがないさ。古くからいるナカさんという現場監督がいるけど、なぜか遠慮して言わないんだ」

「入ったばかりのあなたが言うわけにもいかないしね」

「そりゃそうだ」

奈美江は男の子を抱いて奥の部屋に入っていった。ぼくが上気した顔で立ち上がるとアパートが小刻みにゆれだした。窓の外に目をやると、すぐそばを通る鉄路の上を室蘭行きのコンテナ車が長い時間をかけて通りすぎていった。

それにしても、今の塗装店に入ったときのきっかけは印象的だった。子どもができて足りない収入を何とかしなければと思ったとき、配っていた新聞の区域で塗装店の看板に目がいった。学生時代から絵を描いていたから、色彩を

扱うという、ただそれだけの共通点を手がかりに事務所のドアを叩いたのだ。

中から中背でがっしりした体格の男性が出てきた。波うったグレーの髪と、整った顔立ちで知的な雰囲気をたたえていた。メガネも似合っていて、白衣でも着せれば大病院の医師に見えなくもない。歳は五十代後半くらいに見えた。ぼくが自己紹介して仕事を探していることを知らせると、静かにうなずいて厚めの下唇をかみ締めるようにひとこと言った。

「いつでも相談に乗ってやるから来い」

紳士的な風貌とは違う親分調の切れのいい言いかただった。しかしその話し方には突き放したようなところはなく、堂々とした中にどこか誠実な響きがあった。ぼくは夕方の配達をすませて再びそこを訪ねた。応対ぶりからして塗装店の社長に違いない男性はさっきと同じ表情で「おう、入れ」と言ってすぐに家に招き入れてくれた。ぼくを座らせたあと、吸いかけの煙草を灰皿でもみ消し、一呼吸おいて聞いた。

「どこに住んでるのよ」
「三年前から線路沿いの花園町に住んでます」
「嫁さんはいるのか」
「妻と半年前に生まれた息子がおります」
社長はうなずきながら経験はあるのかと聞いた。
「はい、塗装屋さんに勤めたことはありません が鉄骨を塗ったことは何度かあります。空調会社に勤めていたとき、機械の架台や配管に塗装することがときどきありました」
それは経験というにはあまりにも頼りないものだが、社長はとりたてて追及もせずに話を続けた。
「幾ら欲しいんだ？」
ぼくは必要なお金を率直に言った。それは未経験の素人にしては低い額ではなかった。仕事以外にしている活動のことも正直に説明した。
「時間を生み出すために新聞配達をしてきたのですが結婚して子どもができたので」
「その活動は金になるのか」

「いいえ、金にはなりません。ボランティアですから」

「若いのに感心だな」

「いいえ。その活動を続けたいので週に四日だけ働かせてもらいたいのです」

それに対して、社長は余計なことは何も言わず、表情も変えなかった。初対面の人間に対して普通は見せるだろう警戒心を示そうともせず、権力ある王のように即断した。

「わかった。いつでもいいぞ」

こうしてあっさりと就職は決まってしまった。社長からはそれ以外にいっさい質問されず、どういうわけか履歴書を出せとも言われなかった。

ここの塗装店は一般住宅を手がけるのは稀で、鉄骨や機械、配管の塗装をおもに請け負っていたが、数年前から船舶の塗り替えに比重をすえるようになっていた。

ぼくの仕事は当初からひたすら錆を落とすことに集約されていた。毎日全身を真っ黒にし

て家に帰り、すぐにシャワーを頭からかけると、たちまち赤茶けた流れが足もとにできる。耳や鼻の穴はいくら洗っても黒い汚れが湧き出てくるし、鼻の中からは黒かびのような飛沫がいつまでも滲み出る。まつ毛の間に絡みついた汚れは簡単に落ちない。女が化粧で目をパッチリさせるのと同じように見えるが本人は痛くてたまらない。シャワーの最も力がみなぎる部分に目の玉をさらす。赤く充血した眼球からはいくらでも黒いものが目頭に溜まる。風呂を出てからも唾を出したり鼻をかんだりして黒いシミを出すものだから奈美江は心配顔で聞いた。

「マスクはしないの」

「していてこうなんだよ。どこからでも入り込むんだ」

「そうなの。でも身体に悪いね。友だちが言ってたわ。塗料を吸って子どもができなくなる人がいるって」

「そんなことないだろう。みんな普通に子どもがいると思うよ」

「そうかしら。一人だけじゃこの子がかわいそうよ」

奈美江は溜息をついて眠っている子どもを見つめた。ぼくは首や頬に出ている吹き出物を気にしながら指で触っていた。

「あんまりいじらないほうがいいわよ」

奈美江が心配するのは無理もない。そのころ使われていた船舶塗料に含まれる鉛や錫といった金属が、いかに身体によくないかは誰でも知っていた。しかし、妻が心配そうに見つめても、ぼくは力なく口を歪めて笑うしかなかった。簡単に他の仕事は見つからないからだ。

船舶塗装は確かにきつい作業だが賃金は安くない。少々のことで泣き言を言うわけにはいかないのだ。冷え込んで曇ったガラス窓を指でぬぐいながら、ぼくは行き交う車の流れを意味もなく眺めた。辺りには夜霧が漂いはじめている。視線の向こうには昔の光景が外の景色にだぶって映っていた。

ぼくが九歳のときに父が失踪した。兄は十一

歳、妹はまだ五歳だった。六歳上の姉がいたが、少し前に海の事故で亡くなっていた。父がいなくなったのも関係あるらしい。その日から三人の、やせ我慢の生活が始まった。父を恨む気持を押し殺しながら、母を助けるためにさまざまなアルバイトをして稼ぎを家に入れたが、親孝行だねと人に言われるのがいやだった。

中学を出てから夜間高校に通いながら勤めたのは暖房機やボイラーを据えつける空調の会社だった。ときどき大きな食品会社に据え付けた空調機のメンテナンスに駆りだされた。ドロドロに溶けた魚肉の詰まった排水溝にぼくが平気で手を突っ込んだとき、傍にいる上司が気味悪がって後ずさりしながら言った。

「おまえ、よく平気でやれるな」

やるしかないじゃないか、とぼくは心で言う。

蜘蛛の巣をかき分けて天井裏のダクトに入るのもぼくの役目だった。太った上司は天井裏に上がることをいやがった。以前、ある会社の社長室を突き破ったことがあるというのだ。そ

れが本当かどうかは疑わしい。小柄で痩せた新入にやらせる言い訳だったかもしれない。

油だらけの排気グリルを清掃するのは大変な仕事だ。家庭用ならいざしらず大工場についているのはとてつもなくでかいのだ。

「あなた、コーヒーが入ったわよ」

奈美江の声がかからなければぼくの回想は続いていただろう。胸元に組んでいた腕に風呂で落としきれなかったペンキがついていた。その先には爪の間に深く汚れが入り込んだ指がある。それをじっと見つめ、ここでへこたれるわけにはいかないと自分に言い聞かせる。やせ我慢でも何でもいい。人は多かれ少なかれ同じような思いをしているのだと思う。コーヒーを飲みほすと、夕闇のむこうを客車の窓灯りが幻想的に夜霧を突いて通りすぎていった。

そこで働いている人たちは、品のよさとは縁のない、がさつで好色な男たちが多かったが、概して素朴な人々だった。危険な雰囲気をたた

えている職人もいたが、仲間うちの喧嘩を見たことはなかった。ただ一度だけ、コージと呼ばれていた茶髪の若者が危ない兆しを見せたことがある。ふだんは黙々と仕事をする青年だが、その日は運転しながらなぜか苛立っていた。

「このやろう」

強引な追越しをかけてきた車に切れたコージは交差点で運転席から飛び出た。そしていきなり前車の窓を開けさせ、運転手の襟首をつかみ、しこたま恫喝したのだ。そのときは恐ろしいほどの殺気に似たものが漂っていた。だが、コージは降りていった刺青のヨシに咎められた。すると、ハッと何かを思い出したような表情をしてすぐに手を離した。

現場責任者であるナカさんの妙に遠慮した態度といい、コージとヨシのやりとりといい、ぼくには何がなんだかわからなかったが、あるとき彼らの素性に気づかされた。六人乗りの車で男たちの真ん中に挟まれて地方の現場に向かったときの会話には驚かされた。それは刑務

所にいたときの思い出話だったのだ。そのやりとりが頭ごしに交わされた。

自分はとんでもないところに就職したのではないかと思った。だが冷静に考えてみれば、数ヶ月を彼らと行動を共にしていて警戒心を抱かせるようなことは一つとしてなかったではないか。だから、このときの事はとりたてて気にはならず、さまざまな人々が世の中にはいるものだと思うに過ぎなかった。

しかしぼくは一度失敗したことがあった。以前ヨシに聞かれたように、コージからも「あんた日給いくらもらっているんだ」と聞かれたとき、つい正直に言ってしまったのだ。これがあとで職人たちの間に不協和音をもたらすことになろうとは思わなかった。

翌日、社長に呼び出された。煙草に火をつけて吸い込んでから煙をゆっくりはき出しながら口を開いた。

「おまえもバカだな。給料のことは聞かれたからってベラベラしゃべるもんじゃないべや」

「はい、すみません」

「古くからいる連中だっておまえより安いのがいるんだからな」

「うかつでした」

ぼくは気づいていなかったのだ。そこにはいろいろな職人が、さまざまな事情のもとで勤めていたということを。給料単価も簡単に線をひくようなものではなかったのだろう。

「まあいい。もう何日か余分に出て来い」

社長は煙を大きくはき、足を組み変えて言った。翌週からぼくはボランティア活動を減らし、余分に働くようになった。そうすることによって帳尻を合わせ、何人かの非難をかわさねばならなかった。その後、皮肉を言う者はいなくなった。それでも週に二日ほどは会報の記事を書き、未開発地域にいるスタッフたちの写真展でプレゼンをしたり書籍を販売したりした。

しかし、そのころからぼくはＰＧＡの活動から徐々に距離を置くようになった。きっかけとなったのは、集めた寄付金の一部が幹部の飲み

食いに使われていたことを知ってからだった。矛盾を感じ、みんなの前で疑問をぶつけてから何人もの役員たちから締め出しをくらった。やがて名古屋にある本部で、集められた寄付金が某政治団体に流れていたことが明らかになり、ぼくは活動から離れた。

虚しかった。七年間の活動はなんだったのか。そもそも何のために自分はこの町に来たのか。それは妻の奈美江も同じであったろう。だが、二人が同じ活動を通じて知り合ったのは事実であり、そのことに後悔はなかった。より多くの時間を仕事に費やすようになったぼくは、必死で塗装職人としての腕を磨いた。

二年を過ぎたころには古い職人たちにけっして劣らない働きができるようになっていた。しかしそれはあくまでも船舶の塗装に関して、他の分野ではまだまだ未経験者の域を出ない。いつのころからか、ぼくは材料の調達方法や塗料の価格、不足した足場の手当て方法や高所作業車のリース代にいたるまで、職人には直

接関係のないことまで興味をもって質問するようになった。小学生のころから廃品を売り、数えきれないほどのアルバイトをしてきたぼくは、物の単価というものになぜか関心が動くのだった。

そうした質問にとりわけ親切に答えてくれる人物がいた。それは老職人の小倉ではなかった。小倉はそうしたことには無知だった。ぼくが選んで質問したのは、みんなからトシと呼ばれていた若者だった。トシは二十歳そこそこと若いのに何でも知っていた。ウエーブがかかった長髪を持ち、背が高く、額に垂れ下がった髪の間からきれいな目を覗かせている。雰囲気が他の職人たちとは異質だった。

トシはいつもモンキーズの曲を好んで繰りかえしテープで聴いていた。まだ学生のようにも見えるが、周囲に臆することもなく音楽をかけ、歌を口ずさむことに文句を言うものはひとりもいなかった。ぼくはまもなくその理由を知った。

「トシは、社長の今いる奥さんの連れ子なんだよ」と小倉が何気ない会話の中で洩らしたのだ。

「でも苗字が違いますね」

「いろいろあるんだべさ。社長も若いころは手いっぱい遊んだらしいぞ」

自分が社長の息子であることを鼻にかけないトシという若者にぼくは好感をもった。そのころからぼくは小さな現場をまかされることがあった。新人を連れて行ったり、小倉と組んだりしたが、いつの間にか細かな采配はぼくがとるようになっていた。元気がよかった小倉も、このころは肝臓に微妙な変調をきたしていたらしい。おそらく酒の飲みすぎによるダメージに違いなかった。

世の中が北朝鮮による拉致問題で騒いでいたころ、ぼくはたった一人で商船の水タンクの塗装をまかされたことがあった。ナカさんに連れられていった岸壁には横付けされた商船があった。風が静かで波は荒くないので、ときおり感じる海への恐怖心はなかった。姉が海で溺

死する瞬間を見たぼくのトラウマは長い時を経ても引きずっていたのだ。

船には誰もいないように思われた。ナカさんと乗り込んで船底にある機関室に入ると、一人しか入れないタンクがあった。ナカさんはぼくに仕事を指示したあと帰っていった。ところが指定された塗料で仕事を始めたとき船のエンジン音が聞こえてきた。それから船は前後左右に激しく揺れ始めた。

「あ、動いている」

思わず声が出た。人がいたのだ。もしやこのままどこかへ連れ去られるのではないか。ぼくはそんな不安に襲われた。しかし、そんなことはないだろうと否定しながらやりかけた下塗りを続けた。二時間ほどでひと仕事を終えて甲板に出ると船はまさに室蘭港に入ろうとしていた。頭のはげた五十がらみの船長が、ごくろうさんと言って温ためた缶コーヒーを渡してくれた。ぼくは安堵しながらそれを飲み、錆び付いた鉄骨や建物が目立つ室蘭港の周囲を眺

めまわした。

コンビナートに春の日差しがそそぎ、海鳥たちが宙を行き来している。タンカーが水先案内のタグボートに先導されて港の奥に入っていった。橋の手前あたりに差し掛かったとき大きな汽笛が鳴った。それを見届けてから、ぼくは再びタンクに潜り込んで仕上げ塗りにとりかかった。

しばらくなりを潜めていたKからの嫌がらせがエスカレートしだしたのはこのころからだった。二年を過ぎてもKは相変わらず大将と呼ばれ、新人のときと同じような雑用を押し付けられていた。おそらくその鬱憤が溜まっていたのだろう。その矛先はぼくに向けられた。

論理立てて話をする能力がどこかで欠落していたKは信じられない危険な行動をとるようになった。並んでグラインダーをかけていたある日、Kが妙に近くに来た。狭い間隔で作業をするのが危険なのは明らかだ。それなのにK

はぼくの手に回転する刃を不用意に近づけるのだった。すぐよけなければ指の一本や二本が失われても不思議はなかった。ぼくが睨みつけて離れると、Kは不敵な笑いを浮かべていた。

しかし次に起きたことはそんな生易しいものではない。全員が油運搬船の甲板でサンドブラストの片づけ作業をしていたときのことだ。空気圧縮機で高速の砂を飛ばし、複雑な形をした機械類の鉄錆が落とされた。そのあと、甲板に溢れている錆が混じった重い砂をスコップで船外に掻き出さねばならないため全員が作業にあたっていた。

一時間ほどでおおかたの砂を運び終わり、ほうきを使っての清掃が始まった。やがてその作業も終りに近づき、多くの職人たちが船から下りかけていた。そのとき、ぼくとKだけが甲板の片隅で一緒になるときがあった。恐怖が訪れたのはそのときだった。周りに人がいなくなったのを確かめるようにして、Kがものすごい形相でぼくを睨みつけ近づいてきた。手には長い

金属製のケレン棒を握っている。Kは鋭い刃をこちらに向けながら不気味な動きを見せてにじり寄ってきた。「わかっているだろうな」とでも言わんばかりの殺気で、たちまちぼくは船べりに追い詰められた。眼下には荒い波がとぐろをまいていた。そうした波を見るたびに浮かぶ恐怖心もまたぼくを威嚇していた。そのとき咄嗟に言葉が出た。

「このことは三好さんに報告させてもらうぞ」

ぼくはKが社長の弟である三好の世話で塗装店に入っていたのを聞いていた。もしかしたら三好は少々問題があるKの身元引受人なのかもしれなかった。そのあと、その勘は的中したようだった。三好という名前を口に出した途端、Kの態度は脅えに変わったのだ。

「頼むから言わないでくれ！」

さっきまで体じゅうから発散させていた危険で不気味なオーラが消え、弱々しい哀願に変わっていた。Kは背中を丸めて船から逃げ出すように去っていった。

その日からぼくは明らかな脅威を感じはじめたが、事を荒立てようとは思わなかった。知的な面で幾らか問題をもっているKが警察のやっかいになることは望まなかったのだ。でもこのままなら危険に違いない。それを避けるためにも会社を辞めたほうがいいという気持は強くなってきた。

このころぼくは軽い抑うつ状態におちいった。外面的な出来事も不安を高めたが、おもに自身の内部で黒い塊がうごめいていたのだ。ぼくがPGAというキリスト教系のグループから距離をおいていたので何人もの仲間がぼくを説得しようと訪ねてきた。でもぼくは会わなかった。組織への不信。大いなる者への不信。道徳への不信。自分を含めて人間そのものへの不信が船底で目を光らせる黒い猫みたいに心をかすめ、ざわざわとした感触をともなってにじり寄ってくるのだった。長年にわたって信じてきたものが瓦解しはじめていた。何が善で何が悪かもわからなくなってきた。不可知論が心

を強く支配しはじめていた。

それでも生きねばならない。父がいなくなってからの、やせ我慢の生き方はやめようがなかった。ぼくは空気を変えたかった。変化がほしかった。塗装店を辞めることを申し出たとき、社長は理由をいっさい聞こうとはしなかった。最後の日、世話になった挨拶に行くと社長は意外そうな顔をした。

「辞めるときに挨拶に来たのはお前が初めてだ。達者にやれや」

「ありがとうございます。社長もお体に気をつけて」

「おう、近くへ来たらいつでも寄れ」

社長の言いかたは、初めて会ったときと変わらないほどあっさりしたものだった。引き止めるわけでも、このあとどうするのかと尋ねるわけでもない。

翌日からさっそく新聞広告から仕事探しを始めた。塗装工の求人はときどき出ているのをあらかじめ知っていた。連絡をとった最初の塗

装店は市内にある大工場の内部で何百メートルもある手すりを塗る職人を募集していた。ぼくは翌日から勤めはじめた。ところが二週間手伝って約束の日に給料をもらいに行くと、雇い主の家はもぬけのからになっていた。

二軒目に行った塗装店の社長は自信たっぷりに「これからは住宅ではなく鉄骨の時代だよ。うちはその専門だから」と言った。ぼくは翌日から巨大な原油タンクの現場で働いた。十日ほど手伝いに行ったころ、「来週から一緒にゴンドラに乗ってくれ」と言われた。

その足場はゴンドラというのは名ばかりで、足場板一枚を二本のロープで吊っただけのものだった。転落を防止する対策は特になく、頼りない板にお愛想ばかりの命綱をつけるだけだった。ぼくは不気味な不安にとらわれた。その数日前に社長に何かの書類に印鑑が必要だからと預けておいたのを思い出したからだ。

そのころ、会社が借金を返すために職人が知らないうちに多額の生命保険をかけて殺した

という事件が何件か続けて起きていた。元来が用心深いぼくは動物的な危険を感じ、理由をつけてそこを辞めた。

それが正しい危惧であったか、まったくの疑心暗鬼であったかはわからない。だが、「これからは鉄骨の時代だよ」と得意げに言っていた社長がいくらもしないで多額の負債を残して突然店を閉めたことを知人に聞かされたとき、辞めて正解だったと思った。

そんなこんなで、結局のところぼくはいつの間にか自分で仕事を始めることに踏み出していた。そのとき、さまざまな材料の調達方法をトシから聞いていたことが役立った。ぼくは手始めに自分の家の近くを回り、錆びた手すりや屋根を見つけては家の人に声をかけた。

初めて受けた仕事は、ある歯科医の自宅を取り囲んでいた白いフェンスだった。錆びた鉄骨をケレンし、錆止めを入れ、仕上げを二回塗るという、けっして難しい仕事ではなかった。三日で仕事を完成させたあと、医師の奥さんが値

段と出来栄えに満足を示してくれたことは大きな自信となった。それから少しずつ道具をそろえ、仕事をこなしていった。数ヵ月後には正式な届けを出して塗装店を始めることにした。新しい材料や道具を学びながら徐々に仕事の範囲を拡大していった。やがて車を整え、足場を購入し、大きな家を請け負うことができるようになった。二年目からは友人やアルバイトが加わり、仕事の量は拡大した。

そのころ、スーツを着て営業で海辺を周っていたとき、しばしば見かける人物がいた。いつもサンダル履きで、焦点の定まらない目で歩いていたのは大将と呼ばれていたKだった。暇そうな様子から、今は仕事に行っていないのは明らかだった。

いつもは遠くを素通りするだけだったが、あるときまともに目があった。まったく違う服装のぼく見てKはすぐに気づかないようだったが、何度かふり返りながら見ていた。虚ろなKの目は、どこかで見たことがある人物を必死で

思い出そうとしているようだった。

小倉の家の近くを通りかかったとき、急に込み上げてきた懐かしさに引かれて立ち寄ってみた。すでに七十歳を過ぎ、仕事から離れて畑仕事に精を出していた。

「小倉さんお久しぶりです。峰岸です」

「峰岸さん？」

「ガンジですよ」

「あれ、ガンジさんか。そんなきれいな格好してたらわからんな。まあ茶でも飲んで行きな」

ひと頃より痩せた小倉は話し方も弱々しく、生気をみなぎらせていたときに比べると別人だった。話は自然と元いた仲間の話になった。

「俺はおととし辞めたんだが、残っているのはナカさんとコージくらいでないかな」

「コージってあの、ちょっと危ない感じの？」

「そうだ。すっかりまともになったぞ。今ではナカさんの片腕だ。テルは女と逃げて内地に行ったらしい」

「女って、例の若い子ですか」

「いや、飲み屋で知り合った女だ。旦那がやくざで大騒ぎだったんだぞ」
「相変わらずお盛んですね」
「こりないやつだわ、あいつは」
「ヨシさんはどうしました？」
「あれ、ガンジさん知らなかったのか」
「ええ、ヨシさんが何か」
「船から落ちて死んだよ」
「え？　いつのことですか」
「もうかなり前だぞ。ガンジさんが辞めた次の年かな」

血の気がひいた。まさかそんなことは。ありありと残る記憶は船の上でKに追いつめられ、危うく落ちそうになったときのことだった。だが小倉の説明を聞くとヨシさんが別の塗装屋の応援に行っているときの事故だったという。そのときKも一緒について行かなかったかと尋ねたが、小倉は知らないと答えた。

「こないだ、大将が浜の近くをブラブラ歩いているのを見かけましたよ。やめたんですね」

ぼくが聞くと小倉は苦い顔をした。

「あいつはとっくにクビになった。シンナーをかっぱらってチンピラから金もらっていたんだ。社長は警察に訴えなかったが、三好さんは責任とるかたちで辞めた」

「社長も大変でしたね。ところで今だから言えるんですが、何人かが刑務所にいたときの話をしてましたね」

「なんだかんだ十人はいたぞ。入れ替わり立ち代わりな」

「どうしてまた」

「あの社長は刑務所から出所してきた人たちを更正させる活動をしていたんだよ。かなり熱心だった。ヨシもコージもそうだ」

「囚人の更正ですか」

「そうさ。最初は驚いたべ」

「はい驚きました。とんでもないところに入ってしまったのかと思ったこともあります」

「そうだろうな」

「でも穏やかな人が多かったですよね。喧嘩も

なかったし」

「それだけは絶対厳禁だったというぞ。働く条件に入っているそうだ。でもあいつらを怒らしたら怖いぞ」

職人たちのそれらしい会話が次々と浮かんできた。自分が初めて塗装店を訪ねたときのことを思い出してみる。社長は余計なことを知ろうともせず即断でぼくを雇ってくれた。履歴書を出せとも言わなかった。ぼくは心の中に今まで味わったことがない熱いものがわき起こるのを感じた。錆にまみれて船底で働いていたころのことが幼いときの懐かしい記憶のように思い出された。

そのころからぼくは世話になった塗装店の近くを通ったとき、社長の顔を見に立ち寄るようになった。新しいプレハブの事務所ができ、社長はいつもソファーに座りながら足をガラストップのテーブルに投げ出していた。新しい事務員もいて、以前にはない家庭的な雰囲気が漂っていた。ここで働かせてもらったおかげで

家族が生活していけることを感謝すると、社長は以前には見たこともないほどに相好を崩し、ぼくのささやかな活躍を喜んでくれた。さらに数年ぶりに社長に会いにいったときは、白くなった髪を撫ぜながらどこか淋しそうで、ぼくが挨拶すると肩を落として力なく言った。

「小倉のとっつぁんが死んだよ」

その後、世の中にはバブル崩壊にともなう大嵐が吹き、ぼくもそれなりに翻弄された。元請けが倒産し、友人が自殺し、自分でも多額の負債をかぶって金策に走りまわった。多重債務におちいりながらも、そこから這い上がるためにしぶとく、諦めず、ときには仮面をかぶり、見栄を張り、がむしゃらに生きた。

知人を通して社長が癌に侵されていることを聞いた。そのことを胸に秘めて立ち寄ると、すっかり老人になっていた社長は寝転んでいたソファーから嬉しそうに起き上がり、「どうだ？　儲かってるか」と言った。

ぼくの話を静かに聞いたあと、社長はなぜか神や仏のことを質問するのだった。　むかし勤めているときにぼくがその種の本を読んでいたことを覚えていたのだろう。社長は回ってくる宗教関係のパンプレットを見せながら、どう思うか。人間にとって宗教は必要だと思うかと尋ねた。その唐突ともいえる質問は思いつきで軽々しく答えることができない性質のもので、ぼくは明確に答えられなかった。

社長が亡くなったことを知ったのはその翌年の秋だった。半年ほど地方の現場にいたため、すでに葬儀も終って数ヶ月が過ぎていた。ぼくは肉親がいなくなったような寂しさに襲われ、伝えてくれた知人を前にして絶句した。

車を走らせ、近くにあった公園の木立の下に停まった。自分の中でひとつの時代が終っていた。赤く色づいた樹木のあいだから枯葉が音をたててフロントガラスに降りそそいでいる。二羽の鳥がしわがれた声を出しながら公園の葉だまりに舞い降りた。仲間と離れてこの町に住

みついたカササギがいることを地元の新聞で読んだばかりだった。自分が平和運動への理想を抱いてこの町に来たときのことを思い出した。今の自分はその活動から離れ、このカササギのようにすっかりこの町に定着して家族を持っている。

思い出の場所を訪ねてみたのは、秋がすっかり終わり、最後の葉っぱが樹木に数枚ばかりかじりついているころだった。その日は風も強く、いつ空から白いものが降ってきてもおかしくないほど寒々としていた。

その場所は荒れ果てていた。何台もの使われなくなった車が放置され、誰もいない事務所は閉じられていた。ガラス窓から覗くと乱雑に椅子や机が積まれている。誰も塗装店のあとを継ぐ者はいなかったのだろうか。気になったぼくは隣の人に尋ねてみた。

「ここにあった塗装店は、社長が亡くなってどうなりましたか」

「跡継ぎがいなかったみたいだね。今は相続の

ことでもめていて処分できないでいるらしい」

ぼくは再び、誰もいない事務所の前に立った。相続のことでもめているという隣人の言葉がひっかかった。そういえば、社長が今の奥さんとは籍を入れず苗字も違っていたのを思い出した。職場で一緒だったトシは社長の後を継がなかったのだろうか。あのあと大学に行ったという彼は今どんな生き方をしているのか。ここにいた素朴な人々はどこへ行ってしまったのか。そんな疑問が次々と想いに浮かんできた。

深閑とした駐車場に吹く風が黒ずんだ枯葉とビニール袋を一緒くたに巻き込んで回転させていた。ぼくにはその何気ない様子がなんとも言えず哀しげに感じられた。誰もいない暗い事務所のガラスを見つめながら、ある日の社長の言葉を思いだしていた。

それは朝の会話だった。ぼくが職場に着いたとき、社長は珍しく職人たちと愉快そうに雑談していた。その前に何を話していたのかはわからないが、とにかく上機嫌だった。美味しそう

に煙草を上向きにすいながら語っていた。

「若いときに手いっぱい遊んでも、俺みたいにビシっとまともになるやつがいるからな」

周りは笑いに包まれていた。社長がなぜ囚人を更正させる活動に尽力するようになったかはわからない。自分が若いときにした何かの苦い体験が土台にあったのかもしれないが、今はそれを知るすべがない。元気で生きていたら聞いてみたかった。

ぼくは、帰りぎわに事務所に向かって直立不動の姿勢をとり、社長がいた席に向かって静かにこうべを垂れた。そのまま帰宅する気になれず、いつの間にか海辺の砂浜を訪ねていた。辺りはすでに仄暗く、遠くのコンビナートに明りが灯りはじめている。

風はやんでいた。気持が沈んだぼくは静かに打ち寄せる波と残照の最後の赤みを見つめていた。砂浜には、シーズンが終って陸に上げられた商船や漁船が影絵のように並んでおり、その横には今は使われていない船の残骸もあっ

た。鯨が解体された跡のように湾曲した船の内部構造が無残にさらされている。

その日、ぼくの視線は新しい船にではなく、うらぶれた船の残骸に向けられていた。そこには過ぎ去った悲哀が醸し出す大切な何かが隠されているような気がしてならなかった。学生時代に夢中で絵を描いていたころのことを思い出したぼくは、こうした廃船を描いてみたい気持に駆られ、指を立てて絵の構図を計るときのポーズをとった。

そのとき黒い猫が黄色い眼をぎらつかせ、唐突に暗い船かげから飛び出てきた。ぼくの視線はどす黒い船底に執拗に向けられ、黒猫と目が合った。鈍く光る瞳は少しもひるまずにこちらを凝視している。

ぼくは静かに視線をそらし、砂の上に屈みこんで暗い淵を覗きこんだ。それはわずかな姿勢の変化だったが、何か途方もない時間を疾走したような気がした。美しいものも、醜いものも、見たくないものや忘れたいものも、すべての絵

の具が混ざりあって濁った闇を作っていた。

錆びつき、貝殻だらけの船底が確かにそこにあった。横を向くと、さっきの黒猫は相変わらずぼくを睨みつけている。目ヤニだらけの老猫は、自分の棲家を荒らすなよ、とでも言いたげだ。その気迫に満ちた眼光をもつ存在は、何かに脅えながらも、それに必死で逆らおうとしているようだった。

ぼくは目をそらし、再び船底を凝視した。そこにこそ労働の記憶が凝縮されている。

やがてぼくはゆっくりと立ち上がった。

「帰ろう」

その短い言葉は、いま自身の心にとりまいているさまざまな想念からの離別なのかもしれなかった。

くびすを返して砂を蹴る。

黒猫は驚いて身をひるがえし物かげの闇に溶けた。そのとき、暗い雲間から粉雪が吹きつけ、海はたちまち陰鬱な鉛色に変った。

了